

1 宗教とは何か1 - 1 : 古典的宗教哲学とその限界1 - 2 : 意味論から宗教論へ1 - 3 : 究極的関心・深みの次元・自己超越性2 近代世界と宗教 - なぜ宗教か -2 - 1 : フォイエルバッハ問題2 - 2 : 現代神学とフォイエルバッハ2 - 3 : 宗教的実在論3 宗教的多元性の諸問題3 - 1 : 宗教の神学

「複数の宗教が存在する中で、なぜこの宗教なのか」

(1) 宗教史とキリスト教思想

1. 問いとしての宗教史の前提

宗教学と宗教史・比較宗教論

聖書学と宗教史学派

世界的諸宗教と出会い

cf. 否定的な克服されるべきものとしての諸宗教

2. 宗教史・精神史という枠組み 政治、文化の歴史と現状の解釈

未分化(sacramental) / 分化(神律の内的緊張) / 分裂(神律の解体)

/ 対立(自律と他律) / 自律の平板化と新しいデモーニッシュなもの危機

/ 新しい神律の探求

(2) 啓示史

3. 宗教史の前提としての啓示史

準備 - 中心 - 受容

終極的啓示 : 準備 成就

受容 終末的実現

4. 歴史を構成する原理としての中心(意味付与原理、歴史意識の構造)

カイロス

中心 始原と終局 意味連関

5. キリスト教的啓示史

イエス・キリストの出来事 = 歴史の中心

6. 偉大なるカイロス(質的な時、決定的な時、転換点)と諸カイロイ

諸宗教の位置

7. 終局における宗教の止揚 宗教と文化の対立と宗教間の区別との克服

宗教批判

「わたしは、都の中に神殿を見なかった。全能者である神、主と小羊とが都の神殿だからである。この都には、それを照らす太陽も月も、必要ない。神の栄光が都を照らしており、小羊が都の明かりだからである。」(ヨハネ黙示録 21.22-23)

(3) 類型論と比較宗教学 - 宗教史の神学の内実 -

8. 宗教史に登場する諸宗教の相互関係をいかに整理するのか。

類型論：宗教という類の中にいくつかのパターン(種)を設定する。

cf. パンベルクの批判、宗教の個別性と歴史性

9. 宗教史か現象学的類型論か、通時と共時との相補性

普遍史は可能か

10. 類型論から実定的諸宗教の比較

何のための比較か

キリスト教と仏教：人間存在の究極目標の象徴化という点で

神の国と涅槃

参与の原理と同一性の原理との対比

それぞれの宗教の強調点の対比 それぞれの伝統内部における再発見
より適切な宗教理解を目指して

(4) 対話と宣教 - 宗教的多元性時代の宗教 -

11. 宗教間対話の諸ルート

相互の伝道活動 / それぞれの宗教を構成的に組み込んだ文化を通して / 個人的出会い

12. 個人的出会いにおけるコミュニケーション = 理想的発話状況

- ・相手の価値を相互に承認し合うこと
- ・対話の当事者がそれぞれの宗教を代表していること
- ・共通基盤の存在
- ・相互批判に関われていること、自己批判・自己理解へ

13. 対話の不毛(対話のルーティンワーク化・セレモニーとしての対話)な限界を超えて

対話の必然性、対話の可能性、対話の現実性

14. 諸宗教間に閉じない対話であること、世俗化時代以降の宗教間対話の意義

非宗教的立場との共通の課題

下からの公共性構築の場としての宗教間対話

15. 対話は宣教と両立するか

16. 伝道タイプの宗教としてのキリスト教

17. 実践的な証明

正当な競い合い

カブ、他宗教による真性の宗教性への目覚めをお互いに喜び合うこと

3 - 2 : ヒックと宗教多元主義

1 . 宗教的多元性(plurality)と多元主義(pluralism)

記述概念と規範概念

2 . ヒックの宗教論の構造

・宗教とは何か：

実体的な宗教の概念規定の限界

ウィトゲンシュタインを参照、家族的類似性における宗教の概念規定

基軸時代以降の宗教の共通性

自我中心から存在中心への変革機能

・なぜ宗教なのか：神の存在論証などの問題、宗教批判への応答

人間の経験を解釈する枠組みとしての宗教と自然主義の二つの可能性

近代の合理主義による宗教批判にもかかわらず、「宗教」は一つの合理的な立場として可能であること。宗教の合理性の承認。

自分がコミットする宗教の合理性を主張する場合に、その主張は他の宗教の信者にも認めるべきではないか。

・宗教の複数性の下で何を選ぶのか：多元主義の選択

「排他主義、包括主義、多元主義」の類型論

3 . 宗教多元主義の中心的主張

・キリスト中心から神中心へ

・宗教現象・経験における信仰対象（複数の、伝統的）と現象を超えた真実在

諸宗教伝統における類似の議論の指摘、カント認識論の参照

・諸宗教伝統の相補性 真理をみざす宗教間対話の意義

4 . 宗教多元主義の問題点：神学的、哲学的、プラグマティックに

・キリスト教神学は宗教多元主義と両立するか

キリストの出来事の唯一性 聖霊の遍在性とのバランス

三位一体論の再解釈

・宗教多元主義は論理的に成り立つか

真実在とは何か

多元主義 1（機能の同一性） 多元主義 2（機能の同一性と実在の同一性）

より精密な議論の必要性

真実在は要請か

統制原理か構成原理か

・宗教多元主義は宗教的多元性の状況において生じる諸問題に対する有効な解答か、役に立つか、東アジアの宗教状況の理解に対して助けとなるか

実践的なレベルへの媒介の議論の必要性

政治・社会思想、公共性論などとの接続が必要

現代の宗教状況について、基軸時代以降の宗教という限定で十分か。

基軸時代以降の宗教の内容について

限定の仕方について

<まとめと展望>

1. 三つの問いとそれに対する答え

宗教とは何か

宗教の実体概念から機能概念へ：意味世界の根拠付け機能

宗教の広義と狭義の概念規定：意味根拠の遍在性と特定の仕方での象徴化

人間存在は本質的に宗教的であるが、その現実形態においては、伝統や状況に制約されつつ、具体化される。

現代においてなぜ宗教なのか、宗教批判にどう答えるか

争点：近代の自律的理性と伝統的宗教との関係

宗教の無意味化あるいは有害性という議論自体が特定の意味根拠からなされている

人間が意味的存在者であるかぎり広義の宗教は存在し続け、狭義の宗教はその具体的な象徴の主要な源泉としての存在意味を保持する

宗教だけでなく精神的な事柄全般への無関心という状況について、どのように考えるか。可能性としての広義の宗教が可能性にとどまり続けるのが通常の状態となるということは、いかなる事態か

複数の宗教の存在していることをどう理解するのか、どの宗教なのか

現代世界の多元化とグローバル化という背景

宗教的多元性は人間にとって歴史的現実であるのか、あるいは過渡的現象か

宗教的多元性を前提に、どのような宗教思想を展開するのか、対話、共生

宗教の価値評価は可能か、基準は

自由な選択と運命的な所属

2. 三つの問題の相互連関（問題群）

いずれの問いも、他の二つの問いと連関している。新たに本格的な理論化が求められている

古典的にはシュライアマハーにおいて、そしてティリッヒ、ヒックにおいて、三つの問題の相互連関は確認できる。

3. 宗教研究基礎論の具体化

既存の理論を越える理論構築には、「人間」をめぐる広範な諸理論を視野に入れていることが必要
諸科学の中における宗教学

4. 例1：「宗教と科学」の関係論

宗教と科学との相互関係を問うための基礎論（哲学、形而上学）

思想史（宗教思想史と科学史）

実践論：倫理的諸問題による理論の有効性の検証

5. 例2：アジア・日本の宗教研究

アジアの宗教状況の理解と分析を可能にする宗教理論の構築

儒教や道教の宗教性、宗教的伝統の多層構造

スピリチュアルなもの・霊的なものと宗教との関わり

伊藤雅之他編 『スピリチュアリティの社会学 現代世界の宗教性の探求』

現代思想社 2004年

6. 宗教研究のために何が必要か（展望にかえて）

- ・ 具体的な個別的な文脈と一般化との往復
具体的な現場を視野に入れること（具体性）
普遍化の努力
- ・ 相互主観的な理論構築へ 公共性の問題
個人の思索と研究グループへの参加
- ・ 人間への関心、知的好奇心